

山頭火コロリ往生の真相

俳僧をめぐる俳人たちの確執

競い合う二人

平成六年九月二十六日、大山澄太が九十四歳で他界した。老衰だった。

大山は、漂泊の俳人・種田山頭火を世に出した人である。昭和十四年十月、死に場所を求めて伊予松山へ渡った山頭火が終の住みかとした「一草庵」の名付け親でもある。

その一草庵から東へおよそ五キロほど行った高台の雑木林の中に、大山の住まいがある。

葬儀の日、雑木林の坂道は訃報を伝え聞いた弔問客の長い列が続いた。

私は通夜の席で、「とうとう胸に仕舞われたまま、山頭火の処へ行ってしまうのですね」

と、思わず大山の写真へ語りかけていた。

一草庵時代の山頭火を調べていた私は、脳溢血でコロリ往生したとされる俳僧の死に疑問を抱き、生前に二度、大山を訪ねたことがあった。最初は平成五年の十一月で、翁はまだ鬢鎌とし、山頭火との交友を尋ねるままに語ってくれた。が、平成六年の七月に再訪すると、翁は筆談もままならないほど老耄とした状態であった。家人の話では、一時間前のことも覚えていないのだという。私は早々に辞去し、複雑な思いで坂道を下った。そして往来からふりかえり、山頭火は自殺ではなかったのか、と樹間の奥へ問いかけていたのだった。

大山澄太と山頭火との出会いは、昭和八年の三月に遡る。

山頭火が七年に及ぶ行乞放浪の旅を終えて庵住したことを知った澄太は、この年はじめて小郡の其中庵に山頭火を訪ねるのである。澄太は山頭火の生き方に心を動かされ、勤務していた広島通信局の機関誌へ執筆を依頼したり、句集を出すなどして山頭火の支援に乗り出す。



その後、山頭火は昭和十三年の十一月に山口へ転居し、さらに翌年の十月に四国の松山へ渡り、一年後の昭和十五年十月に他界するのであるが、二人の親密な交友は山



山頭火の死まで続いた。そして終戦後、澄太は山頭火の^{しゅうえん}終焉の地である松山に居を移し、山頭火が書き残した大量の日記類や俳句を収集整理し、その真価を世に問い続けてきたのだった。かれの^{けいがん}慧眼と苦勞がなければわれわれは今日、これほどまで山頭火に親しむことはできなかつたであろう。

また一方、有名になるにつれて山頭火の人物像にいささかの誇張や誤りが研究者や職者から指摘されるようになった。山頭火自身も、澄太の熱い友情と好意に対して、こんなことを書き残している。

「友よ、私を買ひかぶる勿れ—と今日も私は私に向つて叫んだ、彼は私を買ひ被つてゐる、私に善意を持ちすぎてゐる、君は私の一面を見て他の一面を見ないやうにしすぎてゐる。」

これは、昭和九年十一月の日記なのだが、山頭火の顕彰に際し、このような一面もあることを大山澄太は講演などで率直に語っている。決して意図したものではないだろうが、実像から離れ、大山の「山頭火」が広く世に知られていることも否定できないのである。

山頭火の松山時代の生活とその死については、どうなのだろうか。一年ほどの松山の生活の様子は、『四国遍路日記』『松山日記』『一草庵日記』に詳しく書かれている。人の好い伊予の俳句仲間が、山頭火の衣食住の世話をした。中で

も大山の紹介で訪ねた高橋^{いちじゅん}一洵は朋友の藤岡政一と共に、この漂泊の俳僧を歓待し、親身に生活の面倒をみたことで知られている。高橋は松山高商（現松山大学）の名物教授で、地元では「一洵さん」の名で親しまれていた。かれが世話した一草庵は高商のすぐ裏手に位置し、高橋の家からも近い。「高橋さんの内へ行たり高橋さんが来たりで……」（『四国遍路日記』）と、二人は毎日のように行き来した。



山頭火は日記に、「高橋さん、一洵君、一洵兄、どんぐり先生、どんぐり和尚、一洵老」など、日を経るにつれ、親愛の情あふれる呼称を使って高橋との交流を記し、かれの温和な人柄をおりにふれ絶賛している。

一草庵に庵住するようになった山頭火は、気負いもとれ、これまでになく安穩な日々を過ごしている。が、そんな時、死は突然やって来る。昭和十五年十月十一日早朝であつた。山頭火は脳溢血で事切れたといわれている。

山頭火の कोरोリ往生は、行乞流転の生涯を完結する死に様として、よく知られている。山頭火の死に様は、人生の終末を病院のベッドにつながれて迎えることの多くなった現代人にとって、羨望^{せんぼう}に近い憧れでもある。 कोरोリ往生は山頭火像に欠くことのできない魅力となっている。

ところが、私は山頭火の死について次の一文を目にした。大山澄太が昭和五十八年四月に世に問うた『山頭火の道』に収載したかれの随想である。

「(前略) そこで私は考えてはならぬことを、ずっと今日まで心の中に浮き沈みさせていた。それは、彼の死は自殺ではなかったかということである。死の当日、現場にいなかった私であるくせに、そんなことがふと心をかすめて通るのである。二十四回忌になって、はじめてこの根拠のないことをペンにするのも、私の迷いであろうか。彼は熊本で出家する前に、電車道に立って自殺しかけている。『其中日記』によると、小郡でも、睡眠剤をわざと沢山のんで一応死んでいたことを記している。いずれにしても孤独で死んで行った彼の死の真相が、 कोरोリ往生であったかどうか、それは山頭火一人の知るところである。」

この一文が単行本に再掲された昭和五十八年は、第二次山頭火ブームのさめやらないころであった。私はこのような時期に、 कोरोリ往生に疑問を呈する文章を世に問うた大山の真意をはかりかねた。

「現場にいなかった私であるくせに」と書いているように当時、広島にいた大山は山頭火の死に際に立ち合っていない。したがって、 कोरोリ往生も山頭火の死を看取った松山の俳句仲間からの伝聞であった。「真相は山頭火一人の知るところである」としながらも、大山は、自殺ではなかったかという疑念をぬぐいきれないでいるのである。

その疑念は、直接名指しはしていないが、松山の俳句仲間に向けられたものと解してよい。

「考えてはならぬことを、ずっと今日まで心の中に浮き沈みさせていた」というかれは、松山で山頭火の身近にいた人物が、俳僧の死の真相を知っていると見込んでいたのではないか。私にはそのように受け取れるのである。大山には、その人物が特定できたのだが、ついに真相を聞き出せなかった。そして、そうだとすれば、その人物は、山頭火の死んだ日の朝、「キンタマのシワまで伸ばして、きれいに拭いてやったぞなもし」と、一草庵に駆け



つけた藤岡に語った高橋一洵をおいて他にあるまい、と私は思うようになった。はたして、高橋一洵は山頭火の死の真相を知っていたのであろうか。

松山時代の山頭火の実像を調べ始めた私は、地元紙で記者をしていた作家の
函子^{すし} 英雄から、次の話を聞いた。

函子がまだ文化部のかけだしの記者だった昭和三十一年十月、山頭火の十七回忌の法要が一草庵であった。取材を終えて函子が帰りかけると、背後で呼び止める声がした。大山だった。大男のかれが傘から恵比須顔をにゅっと出し、俳句ができたから、と紙片を見せた。よかったら記事に使ってくれという意図らしかった。受け取って、門のところまで来た。と、後から足音が慌ただしく近づいて、また記者を呼び止めた。わたしもできました、と声があがった。^{はかま}袴

^{すがた}姿の小柄な男が俳句を書きつけた紙切れを函子に手渡した。高橋一洵だった。二人は、まるで競い合うかのようなようだったという。

調べてみると、十七回忌の様子は同年十月十四日の地元紙に、「全国各地から献句」の見出しと写真入りで紹介されていた。が、二人の句はなかった。私は大山が昭和五十六年に出した『生誕百年山頭火』（春陽堂書店）をめぐってみた。中に十七回忌の様子が、主だった人たちの献句や出席者の氏名と一緒に記されている。八句ある献句の最後は澄太で、「西の風浄らかな何処を歩いていることか」

とある。が、一洵の句はない。出席者の方に名前があるだろうと探したが、なぜかなかった。

昭和三十三年一月、高橋一洵は五十九年の命を終えた。心不全だった。葬儀に際し、二人の間柄を^{おもんぼか}慮って故人の友人が大山に弔辞を、と水をむけたが、大山から色よい返事がもらえなかったといわれている。

未発表の日記の発見

私が高橋一洵（本名・始）の三男が松山にいることを知ったのは、大山澄太と国文学者の高藤武馬が編集した『山頭火全集』（昭和四十八年発行、春陽堂書店）の第七巻に目を通していたときである。この巻は書簡編なのだが、書簡の最後に「日記補遺」という目次が特別にある。開くと、日記の前に、澄太の注書きがあった。

「注＝昭和十五年十月六日までの日記は、既に第六巻に発表しているのが、今夜、松山の故高橋始氏の三男正治さんが、先日来山頭火ばかりでなく、すべての書類を整理したところ、この十月六日から八日までの日記が出て来たので取り急ぎこのコピーをとったと言って、御持参下さったものである。

十月六日は発表ずみのものと、ここに二回併せて三回書いているが、それぞれに違うところもあり、これは七日の二回も同様に、日付を誤ったのでなく、何かしら書いても書いても意に充たぬ感じがするまま、重ねて書いたものではないかと思われる。或いはこの頃から既に脳卒中のきざしがあつたかも知れない。」

よほど嬉しかったのであろう。澄太は「今夜」と、まず十月六日から八日までの日記が手に入った日にふれ、この注書きの末尾に「昭和四十八年五月八日夜」と日付を記し、この記念すべき「今夜」の日時を明記していた。

かつて、昭和十六年八月、澄太は山頭火の遺稿集『愚を守る』を春陽堂書店から刊行した。が、この遺稿集では、山頭火の最後の日記は十月六日で終わっていた。日記の提供者は、高橋一洵だった。一洵からは一草庵に遺された日記の写しが澄太のところへ持ち込まれたが、それは、十月六日までしかなかったのである。しかし、山頭火を知る澄太にとって十一日の早朝にコロリ往生したというかれの日記が、六日で終わっているとは考えにくいことであつた。かれは、六日の日記を山頭火の絶筆とはせず、新たな日記の発見を三十年来待ち望んでいたのである。

注書きでは、続けて次のように書いてある。

「友人たちへのハガキは、今のところ十月六日付下関市長府の近木黎々火宛の一通が最後のものと認められているので、十月八日の日記はまさに絶筆である。」

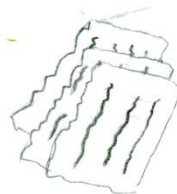
その存在を確信していた日記が思いがけない時に手に入った喜びも手伝ってか、澄太は八日の日記をもって、山頭火の絶筆としたのである。おりしも、昭和四十七年四月から刊行が始まった『山頭火全集』は、この二月で第六巻までの配本が終わり、最後の第七巻の「書簡編」も校了し、六月下旬の刊行を待つのみになっていた。三男の正治が持ってきた三日分の日記は、全集の掲載にぎりぎりのタイミングで間に合ったのである。

この一月、私は書家の高橋正治を訪ね、「日記」発見のいきさつをかれの口から直接聞いた。

それは、昭和四十八年三月の春分の日だったという。一洵の書齋を整理していた正治は、一冊の仏教書の中に大学ノートの切れ端が挟まっているのを見つけた。鉛筆でぐにゃぐにゃ何か書きつけてある。父の字ではない。目を落として、字面をたどった。日記のようだった。十月六日の日付が三回、その最初の分は「秋祭り。和尚さんの温言一」で始まっている。あとの二回は「今日明日は松山地方の秋祭り」と同じ書き出しだが、最後の分は二回目の倍ほどの長さである。そして、七日の日付が二回。さっと目を通し、一回目の内容にやたら「感謝」という言葉が書きつけてあることに気付く。二回目のは、内容も短く、「感謝」の言葉はない。そして、十月八日。この日は一回だけだが、全部で六回分の日記の中で、この八日の分がもっとも長い。八日の日記の最後の数行を判読し、正治は大変な発見をしたことに気付いた。そこには、

「拜む心で生き拜む心で死なう、そこに無量の光明と生命の世界が私を待って
みってくれるであらう、巡禮の心は私のふるさとであつた筈であるから。一
夜、一洵居へ行く、
しんみりと話してかへつた、更けて書こうとするに今日は殊に手がふるへる。」
とあった。

山頭火の未発表の日記に他ならなかった。



日記発見の興奮が引くと、正治の胸中には疑念が渦巻き始めたという。なぜ、この三日間分の日記だけがノートから切り離され、書齋の本の中にあつたのか、不可解であつた。

全集の刊行に先立ち、ここ数年来、大山は何度も高橋の家を訪れていた。かれは一洵の妻の初子から山頭火の遺品の入った柳行李を開けてもらい、日記や書簡などを熱心に筆写していた。高橋家としては、山頭火の遺品はすべて大山へ見せたはずであつた。家人はだれも、この三日分の日記の存在を知らなかつたのである。

どうやら、父はこの日記の断片を密かに隠し持っていたようだ、と判断を下すまでに正治は一月を要したという。高商の名物教授だった父は、この当時、三十路を越えたばかりの正治にとって、なお身近な偉人でもあつた。父の葬儀の日、大通りを埋めた吊問客で路面電車が何度も立往生した話を、正治は誇らしい気持ちで思い出すことがあつた。そんな父にも、人間的な迷いがあつたのである。その迷いを父に代わって自分が断ち切るつもりで、「日記」を大山の元へ届けたのだという。

削除された跋文

山頭火の死の発見者はだれだったのか。

定説はこれまで、一草庵の隣の御幸寺の夫人ということになっていた。それは、俳人の金子兜太が『放浪の詩人たち』で書き、また高藤武馬が『楽書山頭火帳』の中でふれ、さらに山頭火研究家村上讓も『山頭火一境涯と俳句』に記しており、いつの間にか発見者は御幸寺夫人ということになったのである。しかし、実際にかれらが死の現場に居合わせたり、御幸寺夫人に会って直接取材したというわけではない。この定説の根拠は、大山澄太の『俳人山頭火の生涯』（彌生書房）の次の記述からきているのである。

「十日の夕方、御幸寺の奥さんが庵の前を通りかかり、妙に心をひきつけられたので入ってみると、山頭火は上り口のところに倒れて苦しんでいる。『先生どうなされました』と近よっても返事がない。酔って倒れているのであろうか、それにしてはいつもと違う。酒のような臭いものを吐いて、襟元も畳も汚れ、前をはだけて乱しているので、着物のすそを合せ、奥の間へ抱きこんで、安静にさせ、その辺を拭きとって、枕元に洗面器を置き、蒲団を着せて一先ず帰ったのであるが、どうも気にかかる。和尚さんにそのことを告げると、『それは心配だ。しかし今夜は句会があるので、もうやがて一洵さんたちが来られる。そしたら、よいようにして下さるであろう』と、しばらく様子を見ることにした。

やがて、同人六、七人が来庵。しかし同人たちは例の如く酔払って倒れているのだと見た。



そこでいつもの如く十一時過ぎるまで呑気に句会をつづけ、時々隣の室をのぞいては『おうい、先生、まだ醒めんかえ、ようねるねや』と言ったりした。しかしその眠りは異様な眠りだった。皆は心を引かれながらも、山頭火一人を庵に残して帰って行った。一方御幸寺夫人は妙に山頭火のことが気にかかって、ろくろく眠れなかった。不安な一夜が明けそめてきたので庵へ行ってみると、もういけない。胸部は少し温かいけれども息が止まっている。そこで一洵さんに急を告げ、お医者へ走るやら、そこからのことは夢中だったので覚えていないと言われる。

かくて山頭火の死は十月十一日午前四時と医師によって推定せられた。」

この一文の終わりは、「それからのことは夢中だったので覚えてないと言われる」となっていて、大山は御幸寺夫人に会って書いたようになっている。だが、この当時、大山は松山にはいなかった。広島県の仏通寺で逓信省局員の精神修養

会を指導中だった。松山からの訃報に接し、十二、十四日と二度弔電を打っている。何をおいてもかけつけたかったであろうが、仏通寺を離れることができなかったのである。十七日には、山翁の子息の健が遺骨を抱き、藤岡を伴って仏通寺に大山を訪ねている。かれが松山へ来たのは、二十五日である。御幸寺夫人に会ったとしたら、たぶんこの時であろうと私は推測してみたものの、何か釈然としなかった。

私のこの疑念を晴らす糸口を与えたのは、『層雲』の昭和十五年十二月号だった。「山頭火追悼号」と銘打ってあるこの号に、高橋一洵は「山頭火和尚死の前後なにやかや日記」という長文を寄稿していた。

この「日記」は、「十月七日、夕食をすませて、ほっとしていた頃山翁が見えた。晩めしをおやりんかいなもしと言ったら、いや今日は食べとうないと首を振った。(後略)」に始まり、十月十九日までの十三日間、山頭火の死の直後の様子を手に取るように具体的に書き綴っている。

そして、この「日記」では、死の発見者は高橋一洵自身であった。句会がひけた後、山翁の様子が気になった一洵は十一日の朝の二時頃、再び一草庵に山翁を見舞ったところ、山翁の身体は硬直し昏々と眠っていたという。

「時既に容体急変し身体硬直してただ昏々と眠らる。呼べど答えず。つづけて呼ぶ内に、ふと我に復ったものの如く眼を見開いて私の顔を射るように見守って離れず。手を握れば辛うじて僅かに握り返さる。次第に眼を閉じて再び昏睡の状態に陥る。脳溢血と考えられる。」

と、さわりの部分が記されている。

一洵は御幸寺住職へ山翁の急変を告げ、それから今度は医者と呼ばいに街へ走った。午前五時二十分、医者が来て、死因を脳溢血と診断した。

「山翁、あはれ茲に人生を終りたるか。ああわれあやまてり、あやまてり。昨夜なぜに医師を呼ばざりしか。今は呼んで更に甲斐なきものを而も其の暫しの留守のひまに、たつたひとりで逝きしかな。許し給へとひしと亡き骸に取りすがれば胸の温くみは残りて生けるもの、如し。」



と、一洵は悔恨と^{どうこく}慟哭を綴る。

さて、面白いことに、第一発見者が高橋一洵であることを裏づける文章を、かつて大山澄太は書いていた。昭和十六年八月初版の『愚を守る』に、高橋は三十九頁にわたる長文の^{ぼつ}跋を載せているが、山翁の死の場面は、大山が先に『広

島逋友』に発表した「白骨の旅人」という一文をそっくり引用している。そのさわりの部分は、こうである。

「句会は十一時に終わり、一同庵をあとにしたのであるが、一洵だけはどうも心ひかれる思いして、夜半に再び翁を見に戻られたところ、既に心身変調、急いで醫を招いたが既に事切れて一切はせんかたなかりしと。脳溢血だったのである。」

「白骨の旅人」というのは、遺骨となって息子の健の胸に抱かれ、広島の大山の元へ旅してきた山頭火のことである。大山は健に同行して来た藤岡から、山翁の死の様子を聞かされ、その時の感慨を「白骨の旅人」にしたためた。後に疑問を抱くようになったのかも知れないが、この時点では、大山も一洵が最初の発見者であったことを認めているのである。

大山が昭和二十八年六月に再版した『愚を守る』には、高橋の「跋文」がすっぽり削除されている。そこにどのような意図が働いたのだろうか。

私は『山頭火の道』で、大山がもらしている「自殺ではなかったか」という言葉を思い浮かべた。

澄太あつての山頭火

もともと山頭火には、自殺の動機や気質がある。母の身投自殺とその死体を見た衝撃、神経衰弱による大学中退、種田家の破産、父の行方不明と弟の^{いし}縊死、熊本や其中庵での自殺未遂。五十三歳（数え年）の年の暮れ、死に場所を求めて東上の旅に出るが、死にきれなかった。

私は、最後の三日間の日記に着目した。

六日の三回分のうち、三回目の日記には感謝の言葉が多く述べられている。「昨年一洵老に連れられて此處新居へ移って来た。」とふりかえり、「澄太が一草庵と名づけてくれた、一木一草と雖も宇宙の生命を受けて感謝の生活をつづけてゐる、感謝の生活をしろよとは澄太の心であつたのであらう。」と記し、一草庵の間取りや周囲の環境を書き綴り、

「すなほにつましく私の寢床をこゝに定めてから既に一年になろうとしてゐる、それにく……一。感謝の生活、私は本當にそれを思ふ。」

と結ぶ。

七日の日記は次々と浮かぶ感謝の対象を書く。



「國への感謝、國に盡くした人、盡くしつゝある人、盡くすであらう因縁を持って生れ出る人への感謝、母への感謝、我子への感謝、友人への感謝」等々、次々と感謝の対象が広がり、「感謝の心で死んでゆきたい」と、到着した境地を吐露する。

そして、八日の日記。七日と同じく感謝の言葉が十六回綴られている。そして、大山と高橋のことを

「澄太や一洵にゆつたりとした落ちつきと、うつとりとした、うるほひが見えてゐて何かなしに人を動かす力があるのはこの心があるからだと思ふ。」

と誉め、最後は既述のとおり、

「夜、一洵居へ行く。しみりと話してかへつた。更けて書かうとするに今日は殊に手がふるへる」

である。

忍び寄る死を山頭火は悟っていたのであろう。

脳溢血の兆候にきづいていたふしがある。日記の内容は日が下がるにつれ、暮らしの身边雑記というより、たしかに遺書めいていく。

大山は八日の日記を絶筆としたが、もしこの調子で九日の日記を書くとしたなら、それは遺書そのものであってもおかしくはない、と私は思う。本当に、九日の日記は一草庵に残されていなかったのだろうか。

句会のあった十日は、夕方から（酒に酔って）寝ていたから日記は書けない。では、九日はどうか。一洵の「なにやかや日記」では、夜七時頃やってきた山翁は、遍路の旅に出ようと思うから句会の時に十円ほど貸してくれ、と一洵に頼んでいる。山翁はいう。

「のんた、わしも長くはないぜ。殊に近頃は體が變調だ。わしが亡くなったら柿の曾たのむ」

そして、急ぎの仕事があるという一洵をむりやり護国神社のお祭りに連れ出した。混雑にまぎれて、一洵は山頭火を見失い、一草庵に先に帰って庵主の帰りを待った。が、山翁はなかなか帰ってこないの、かれは家に引き返した。

しかしこの夜、山頭火はそう夜更^ふかしもせず、一草庵に帰っていたようである。

私は、この推測を裏付ける話を、俳句仲間だった村瀬千枝女から聞くことができた。彼女は八十四歳になるが、山頭火のことはよく覚えていた。

千枝女によると、山翁は十日の朝はやく、ひょっこり家の玄関に立ったという。今夜は句会だから、夫婦そろっておいでなさいと案内する庵主に、彼女は祭りの酒を一杯すすめたが、俳僧はすでに護国神社でいただいたのでよい、と

断ったそうである。これが山頭火との最後の会話になったので、特に忘れないようにしているのだという。とすれば、山頭火は十日の朝はいつものとおりに神社の太鼓の音で目覚め、庵の周辺を掃き、神社からの振る舞い酒で喉を潤うるおしたのであろう。

したがって、かれは前夜一洵とはぐれてしまったものの、ほぼ普段どおり床についたと推測できる。少なくとも、日記を書く時間はあったであろう。メモ魔のかれが日記を書かなかったとは考えにくい。六日から八日の三日間に重複して六回も日記を綴つづっていることからして、九日も日記を書いたとみなすほうが自然ではないだろうか。

十日の朝、山翁は千枝女の家からその足で一洵居に顔をのぞかせ、一洵の妻の初子に祭りのあいさつをいった。今年で八十七歳になる彼女も、この日のことを鮮明に覚えていた。山頭火は、いつものほがらかな顔だったそうである。奥へどうぞという誘いに遠慮し、かれはすぐに庵の方へ引き返したという。それから昼すぎまで、山頭火を見たという人はいない。

私の調査では、次に山翁に会ったのは広瀬無水という「柿の会」の同人である。無水は昭和四十五年に八十歳で他界したが、家人によく山頭火のことを語っていた。それによると、無水がこの日の昼すぎ、一升下げて一草庵へ行くと、翁は畳にぐったり横たわっていた。昼に兵隊さんと飲んだのだという。便所に連れていった帰り、翁は洗面器に少し吐いたが、それが大変臭く、無水は薬品を飲んで自殺をはかったのではないかと直感したそうである。

いま一つ、私は家人からこんな話もきいた。

満州から長男の健が遺骨を引き取りにやってきた時、かれは出迎えた同人たちに「父は自殺でしたか」と訊きながら肩を落とした。一洵は即座に否定し、「大往生だった」と健を励ました。

健が一洵の言葉をどこまで信じたかわからない。が、ともあれ、「柿の会」の仲間はずでにこの時、山翁が念願のコロリ往生をとげたという見方で一致していた。無水のように「自殺」の疑いをさしはさむ余地はまったくなかったという。

それは当然のことだろう、と私は思った。

今日ほど有名でなかったにしろ、『層雲』の仲間内では、山頭火は尾崎放哉と



並び称される巨星であり、かれの句や生活は大いに注目を集めていたのだ。^{わらし}草鞋を脱いで草庵に落ち着いた果てが「自殺」では、親身になって世話をしてきた松山人の両目はまるつぶれであろう。

だから、と私は推理をすすめてみる。

山頭火の死が「自殺」で、かれが九日に「遺書」がわりの日記を記していたとするなら、一洵はだれにも見せず、一人胸の奥深くしまいこんだであろう。自殺では困るのだ。

さらに、九日の日記が「遺書」であるなら、六日から八日までの全部で六回分の日記のうち、六日の最初の日記を除いた五回分は、「遺書」への前兆としても読める。また、自殺の直接の動機を暗示するような記述が八日の日記にある。

「手のふるえ」を覚えだした山頭火は、 कोरोリ往生を願うより、もっと現実的に中風の「寝たきり」生活を^{おそ}畏れたのではないか。放浪の俳人は、もうだれにも迷惑をかけたくなかったのだ。そこで、ひとり一洵にだけ、「遍路に旅立つ」という理由で借財を申し出、それとなく葬儀の費用を用意させたのではなかったか。

日記を公表しなかった高橋一洵の「深い意図」は、 कोरोリ往生の真相にあった、と推理できる。

ともあれ、九日の日記が見つければ、すべてはつきりするであろう。

ところで、大山澄太は『生誕百年山頭火』の中に、「白骨の旅人」を収載し、山頭火の死の発見者が一洵であったことを明らかにしている。また、村上讓も『新潮日本文学アルバム・種田山頭火』（平成五年六月発行）で改めて、一洵が発見者と記している。

平成六年の初夏に大山を訪問した私は、九日の日記の存在の有無を確かめたかった。

大山は、縁側の安楽椅子で休んでいた。訪問者を認めて、翁は上体を起こした。来意を告げた私へじっと視線を注ぎ、「ありがたい」といった。「いつもここですか」。問うと、柔和な表情でうなずき、「ありがたい」をくり返し、窓の外へ合掌した。縁側から庭木の梢ごしに、遠く石鎚連峰の青い山並みが眺められる。

私は用意してきた質問をいくつか、筆談で投げかけてみた。その多くは内容がよく伝わらず、オウム返しに返ってくるのは「ありがたい」の言葉だった。確かな応えを得たのは、あなたは人生をどのようにふりかえりますか、と訊いたときだけである。

翁は床に並んだ『山頭火全集』を指差し、「あれを読めばわかります。それ以

上のものはない」といった。

澄太なくして山頭火はない。

帰りぎわ、坂道の脇に建てられた澄太の句を読んだ。

坐しては観る山のむこうの山

大山澄太いま、山頭火と共にその山のむこうを歩いて
いるのだろうか。

